

地域の病院に勤務して

下関市立豊田中央病院

松谷 博之(山口県)

私は、昭和六十年に自治医科大学を卒業し、義務年限九年間を山口県内の病院・診療所に勤務しました。現在の下関市立豊田中央病院に、平成九年から現在まで約十二年間勤務しております。

現病院は下関市北東部、市街中心部から自動車で約四十分程度の山間部にあります。常勤医は内科三名、外科一名、眼科二名の小規模な地域中核病院です。内科はすべて自治医大卒業医師。外科、眼科は山口大学医局出身医師です。整形外科外来(週二回)、脳神経外科外来(月二回)、消化器検査(週一回)、心臓超音波検査(週一回)は、山口大学医局から非常勤医師を派遣していただい

おります。

勤務としては、病院外来・入院診療・付設診療所の出張診療、病院当直を行っています。下関市中心部には、下関市立中央病院、済生会下関総合病院、国立関門医療センター、下関厚生病院の四施設があり、救急・重症、専門医療が必要な場合は連携をしていただいております。

当院の日常診療の対象は、市町村合併前の旧郡部の地域住民が主で、高齢化がすすみ、受診はほとんどが七十歳以上の患者です。また、再診が多く新患は少なく、慢性疾患が主体です。地域の特性として、市街中心部と比較して住民の移動が少なく、同一患者が継続的に受診され

る場合が多くなります。そのため、個々の患者の疾病・生活習慣・生活環境・家庭状況などが把握しやすいという面があると思います。しかし、病院だけの活動では把握するのに限界があり、福祉・訪問看護などと連携した活動が必要となります。しかし、現状としては各部署が多忙で時間的整合がつかず、十分にまだ連携がとれていない面もあります。各部署の人的不足も原因として考えられます。

私が医師になりたての約二十年前と比較して、インターネット、テレビなどの情報メディアの発達により、地域においても最新の医療情報は得られやすくなりました。それに伴い、地域の医療に対する住民の期待・要求度も高くなってきており、専門医志向がみられ、市街大病院への受診を希望される場合があります。情報・知識の獲得の利便性は向上しましたが、現実の先進医療・専門医療は、やはり市街部に行かないと享受できず、受療の面での地理的・時間的距離は約二十年前とあまり変わっていないように思えます。地域に設備・専門医の配置された病院を

つくることは、現実的には人的資源、財政的資源、採算性の面でも無理であると思います。地域中核病院として自己完結型の医療が提供できれば、地域住民は市街中心部に出る必要はなくなりますが、地域の病院すべてが自己完結型の医療ができる状況ではないと思います。これを目指す方向としては、病院の統廃合・機能分担が今後必要になる可能性があると思います。病院が減少すると地域住民にとっては日常診療の面では不便さが増強する可能性があると思われま。私が現在勤務している病院も自己完結型の医療提供ができているとは言えません。しかし、現在できることは、個々の患者の状況を福祉・訪問看護などと連携し、把握して、現在最善と思われる医療を提供し、未然に重症化を予測・予防し、専門医療が必要な場合には適切な時期を失わず、紹介することではないかと考えています。地域は対象とする人口が限られており、健康・未病の段階から、予防活動・早期発見早期治療に介入できる病院として今後も努力していければと考えております。